

文章表現法

河村清一郎・八角真
石丸晶子・佐藤嗣男 著

桜楓社

文章表現法

河村清一郎・八角真 著
石丸晶子・佐藤嗣男

桜 楓 社

著 者 略 歴

河村清一郎（かわむら・せいいちろう）
昭和5年生。第二高等学校（文科丙類）を経て、東京大学文学部国語国文学科卒業。東京大学大学院修了。現在、明治大学教授。

八角 真（ほすみ・まこと）
昭和6年生。明治大学文学部卒業。明治大学大学院修了。現在、明治大学教授。

石丸 晶子（いしまる・あきこ）
昭和10年生。東京大学文学部美学美術史学科および国語国文学科卒業。東京大学大学院修了。現在、東京経済大学助教授。

佐藤 嗣男（さとう・つぐお）
昭和18年生。早稲田大学文学部卒業。法政大学大学院修了。現在、明治大学講師。

文章表現法

昭和54年4月5日／初版印刷
昭和54年4月10日／初版発行

定価 800円

著 者 河村清一郎／八角真／石丸晶子／佐藤嗣男

発行者 及川篤二

発行所 株式会社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町2-8-13

電話／03-295-8771 振替東京／6-18020

印刷所 足柄製版印刷株式会社

製本所 長島紙工製本所

Printed in Japan 1081-790424-0723

は し が き

本書は、大学の教養課程、短期大学等における、「国語表現法」あるいは「文章表現法」のテキストとして編纂されたものである。レポートや論文を書く際の要領を学び、文章による表現力を身につけるべく、ことばや文章の基本的な問題を考察するとともに、実際に文章を書く際の、具体的な事項について解説した。「表現法」は、一般に、話しことばと書きことばの両面を扱っているが、大学教育の実状に即し、本書においては、話しことばの問題は、これを割愛した。

第一章において、ことばの機能や特質、文の構造を論じ、第二章で文章表現の特質、文章の構成、種類について述べたあと、第三章において、アウトラインを作る問題を中心に、文章を書くに当たって必要な具体的事項を取り上げた。第四章では、当用漢字、かなづかい、送りがな等、用語・表記の問題を解説した。

執筆の分担は左記の通りである。

第一章 ことばと文 (佐藤嗣男)

第二章 文章 (石丸晶子)

第三章 文章の作成 (河村清一郎)

第四章 国語の表記 (八角 真)

なお、本書の執筆に当たり、先行諸文献から多くの啓発と恩恵を受けている。付記して感謝の意を表したい。

昭和五十四年三月

河村清一郎

目次

第一章 ことばと文……………セ

一 ことばのはたらき……………セ

1 生きたことば……………セ

(1) 「信号」と「記号」……………セ

(2) 「野性のまま」のことば……………二

(3) 言語と表現……………三

2 話しことばと書きことば……………ハ

(1) 文字と言語……………六

(2) 意味とひびき……………三

二 文の構造——日本語の語法……………六

1 語と文……………六

2 文の構造……………六

(1) 文節・連文節……………六

(2) 入子型構造……………九

3 日本語の述語様式……………三

第二章 文章……………七

4 “テニヲハ”のはたらき……………三

5 待遇表現……………三

一文 章……………七

1 種々の表現形式……………七

2 文章の特質……………四

(1) 文章に必要な条件……………四

(2) 「内容」と「型」……………四

(3) 文 体……………六

二 文章の構成……………五

1 「ことば」の形成……………五

(1) 経験と「ことば」……………五

(2) 日本語の性格と特徴……………五

2 思考の形式……………六

3 文章の構成……………六

4 文章の型……………六

三 種々の文章……………六

第三章 文章の作成……………六

一	今日の文章	六
二	主題と題材	七
1	執筆の目的	七
2	主題の決定	七
3	題材の選択	七
4	表題の選定	七
三	アウトライン outline	七
四	文章の作成	七
1	書き出し	七
(1)	解題法	七
(2)	題言法	七
(3)	引用法	七
2	段落 Paragraph	八
3	句読法	八
4	修辭	八
(1)	比喩の方法	八
(2)	強調法	八
(3)	変化法	八

五	推敲について	八
第四章	国語の表記	七
一	漢字・仮名・ローマ字	八
1	漢字	八
2	仮名	九
3	ローマ字	九
二	当用漢字と現代かなづかい	一〇
三	用語	一〇
参考文献		一〇
付録		
	送り仮名の付け方	二六
	くぎり符号の使い方	二九
	くり返し符号の使い方	二七
	これからの敬語	二五

文章表現法

第一章 ことばと文

一、ことばのはたらき

1 生きたことば

(1) 「信号」と「記号」

ことば（言語）と人間とは切っても切れない関係にある。人間は言葉を所有することによって、はじめて人間の人間化を可能にしたのである。ことばをコミュニケーション（伝達、伝え合い）の手段、思考の手段として、自他の思考・経験を相互に媒介しあいながら、自我に目覚め、自己を発展させてきたのである。言葉を抜きにしては、人間の個々の成長も考えられないし、また、人間の文化の発展も考えられはしない。

ことばは、たしかに、社会性をもった動物が共同の仕事をするための重要な伝達の手段（方法）ではあるけれども、これを思考から切り離したり、単なる伝達の用を足す道具だとしてしまつてはならないであろう。仮にそうだとしてみようならば、自己の思考を表現することば、つまり、自分の考えを仲間に伝えることばを操作することができるのは人間だけなのだということが、そこでは見落されてしまうことになるからである。その意味では、ことばという側面から見ると、自己の思考を表現することばをもたない動物は固定化し、それに比して、人間は、無限の可能性と可変性を具有していると言えるのである。

人間は歴史の中で、「はじめは動物の叫びとかわらないただの音の信号にすぎなかったものを、幾世代も幾世代もかけて言語に完成し、それによって思考をつくり、世界と自己を頭脳の中で意識するまでになった」(P・シヨシャル著、吉倉範光訳『言語と思考』)のである。世界と自己を頭脳の中で意識する——それは、人間の現実(世界)認識の問題ともかわるわけだが、人間が言葉を手にすることによって、はじめて世界(事物)の本質(意味)を認識することが可能となったということであろう。いわば、ことばを「鏡」とすることによって、人間は現象と現象との、ものとの関係・関連を照し出し、そして掴んでいくのである。と同時に、ことばを媒介として世界の本質に迫りながら、そうすることによって具体的な経験と体験の裏付けのもとにことばに具体的な意味内容をもたせ、ことばを生きた思考の具、「生きたことば」として人間の生活の場にかえしていくのである。

以上、見てきたように、ことばは人間の思想や感情を伝え合う伝達の手段であり思考の手段であるということになるわけだが、例えば、『人間の歴史』(八住利雄訳)の中でイリンが、

どんなさざめきでも、匂いでも、草の上の跡でも、叫び声やなき声でも、何かの理由を意味しているのである。

原始人も亦、世界が自分のもとへ送って来るあらゆる合図に耳を傾けた。が、それらの合図の他に、彼は、間もなく、同じ種族の者達が送って来る他の合図を理解することを覚えた。

森のどこかで、獵人がシカの足跡を見つけた。その獵人は、手を振って、あとからついて来る他の獵人達にこれを合図する。みんなは、まだ、シカの姿は見えていない。が、送られて来た合図によって、もう目の前に、シカの枝の多い角や、敏感な耳を見たように、緊張し、しっかと武器を握りしめる。

地上のシカの足跡は、合図である。手を振って、発見したその足跡を知らせるのは、合図についての合図で

ある。

獵人の誰かが地上に獣の足跡を見つけるか、忍び歩く足音を聞きつけるかする毎に、同じ仲間の人間達にこの合図についての合図を送る。

このようにして、自然が人間に送って来る合図に、言葉——即ち仲間が送る合図の合図がつけ加った。
イワン・ペトロギチ・パウロフは、或る本の中に、人間の言葉とは、この「合図の合図」であると書いてゐる。

と述べているように、ことばそのものは「合図の合図」、言い換えれば、「事物の信号の信号」だということになる。その意味では、ことばはけっして事物の等価物ではない。そのことばが指し示している事物そのものではないのである。その限り、ことばは実体ではない。ことばは「事物の意味の等価物」なのである。

私たち人間が日常、生活の中で用いていることばは、まさに「信号としてのことば」なのである。けれども、言葉がその場限りの信号にすぎないとすれば、一般的、普遍的なコミュニケーション・メディアとしての機能は全く失われてしまうであろう。私たちは信号としてのことばをプールしておかなければならない。プールする——それは、信号を記号化することにおいて、つまり、「信号としての言葉」を「記号としての言葉」としてプールするということである。ということは、現実には私たち人間が用いていることばには二つの側面があるということにほかならない。熊谷孝氏はこのことばの二側面を、「信号としての言語（作用因としての言語）」と「記号としての言語（作用果としての言語）」とに整理している（『文学の教授過程』）。

そこで言われている「記号としての言語」とは、いわば言語学的次元で握まれた「歴史的・伝承的な記号としての言語」、つまりは「民族的・社会的なしきたり」として、また、そのしきたりに対するきまり、という関係側面にお

いて、作用果（結果）としてつかまれた言語」のことである。「いわば社会的なきまりとして一定の意味（語義）をもった語」と、やはり一定の形態法則であり構文規則である文法との相乗積」としてとらえられる、特に言語記述学において顕著に見られるわけだが、一時点において切りとって見たことば——静態としてのことばのことである。ところで、「言語自体とは何か、何が言語自体ということ（いうもの）なのか、という場合、見すごされてならないのは、言語心理学がその次元で対象化するところの言語、すなわち個々の具体的なシチュエーションと、その場面規定のもとではたらく言語の、機能的な作用因（原因）としての側面」でとらえられる、動態としての言葉である。「人間の思考活動（内部コミュニケーション）を支える言語（内語 internal speech）」も、現実のコミュニケーションを現実に保障する言語（external speech）も、この作用因としての言語にはかならない」からである。そして、このような言葉が、事物の信号の信号としてのことばなのであり、まさに「生きたことば」にはかならないのである。

それでは、言葉の二つの側面は二元的に別個に機能するものとしてあるのかというところではない。それは、言語学（「ことば」の科学）が、作用果としてのことばだけがことばそのもの（言語自体）だと言っているわけではないのと同じように、一つの側面のみ限定してことばをとらえることは、生きたことばを操作していく（言語活動）上で、まさに、不可能なことだと言わざるをえない。文法なら文法を、語彙なら語彙をきちんと把握した上で、記号としてのことばを生きた信号として、より優れた思考活動や伝達活動を保障する作用因として操作する——これこそが、本書が課題としている言話表現・文章表現をより優れた、豊かな、潤いのあるものとしていくからなのである。

(2) 「野性のまま」のことば

文法は言葉のあとを追う、とはよく言われることだが、「生きたことば」があつて始めて文法が成り立つことをそれは示している。ことばは固定的にたえず一定の姿・形のままであるのではない。日常つかわれていることば、これこそが「生きたことば」の核をなすものにちがいないのだが、それは、微々たる速度であるにせよ、たえず変形し流動している。

そして、それは歴史的な流れの中での変形・流動ということだけではなしに、個々の人間の場合（言語活動）においても、言表（言語表現）の場面によって、言葉の送り手と受け手の関係によって、言葉は微妙に、あるいは大幅に変形されて用いられることが常である。例えば、詩人の場合の例ではあるが、「飼い馴らされ」た「次第に使い古されてもはや役に立た」なくなった「実用的な言語」のまん中で「たとえば『馬』と『バター』を、『バター』の馬』（cheval de beurre）とならべることによって」「言葉に触れ、言葉を模索し、言葉を撫でながら、言葉に固有の小さなきらめきや、言葉が地や空や水やすべての創造されたものとの間にもつ特殊な親和性を発見」し、「野性のまま」の言葉を復権している様を、J・P・サルトルは指摘している（加藤周一訳『文学とは何か』）。野性のままのことば——ことばを、その配合や組み合わせのしかたを変える・作り変えるといった作業をも含めて、そこに固定化された、あるいは形式化されパターン化されたことばの組み合わせを脱して、その言葉をおおっていると同時にそのことばを喚起しているイメージそのものをも組み変えていく、という意味で、まさに、それは「草や木のように地上におのずから成長する自然のもの」なのである。

源実朝の『金槐和歌集』の中に次のような一首がある。

物いはぬ四方の獣すらだにもあはれなるかな親の子を思ふ

加茂真淵評に「すらか、だにか、一つ有べし。すらだにといふ辞はいにしへにはなし」というのがある。二十七八歳の太宰治が書いている。

金槐集をお読みのひとは知つて居られるだろうが、実朝のうたの中に、「すらだにも。」なる一句があつた。前後はしかと覚えては居らぬが、あはれ、けだものすらだにも、云々といふやうな歌であつた。

二十代の心情としては、どうしても、「すらだにも。」といはなければならぬところである。ここまで努めて、すらだにも、と口に出したくなつて来るではないか。実朝を知ること最も深かつた真淵、国語をまもる意味にて、この句を、とらず。いまになつては、いづれも佳きことをしたと思ふだけで、格別、真淵をうらまな

い。

（『もの思ふ葦』）

国語学的な視点からの見方と、創作的立場あるいは鑑賞（表現理解）という視点からのそれとの違いが出ていておもしろいところである。とにかく、鎌倉政権の中にあつて、北条一族ともはなれ孤立した存在であつた実朝の、北条政子との親子関係を思いやるとき、まさに、そこには「すらだにも」としか表現しえない心情の発露を見出すのである。このようなことばこそ、生きた、野性のままのことばと呼ぶにふさわしいものであると思われる。

もう一つ、例をあげてみよう。金子兜太の『今日の俳句』からである。

強し青年干潟に玉葱腐る日も

作者自身の弁によれば、玉葱が干潟にころがっている情景などは、俳句の題材としていままであまり扱われていないという。それは、干潟と玉葱の結びつき、というよりは、そうした一連のトータルな世界として、そうした情景が私たちの日常生活の中にイメージ（像）としてはなかったということではないのか。「干潟」という言葉が喚

起するイメージ、その固定化した閉鎖的な世界の中で、私たちは現実の光景をも見ていたということではなかったのか。それが、干潟にころがっている玉葱という「奇妙なもの」を発見することによって、「水泳パンツの青年たち」がある一定のイメージをもつてとらえられてき、「干潟」と「玉葱」という言葉を配列することによって、この一首全体が象徴的に一つの世界を、イメージアリに描き出すことに成功しているのである。こうしたことばの使い方・操作の中に、野性のままの、生きたことばの姿を発見するのは容易なことであろう。

実際、ことばが生き生きと使用されているところでは、ことばは唯一の意味内容を有するところの固定的で閉鎖的なものではなく、きわめてイメージアリな、流動的で開放的なものである。開かれた、野性的な、生きたことばなのである。というよりも、そうであらねばならぬ、そうあるはずだ、ということなのだ。芥川竜之介のことばを待つまでもないのだが、

文章の中にある言葉は辞書の中にある時よりも美しさを加えていなければならぬ。

（『侏儒の言葉』）

ということに尽きるのである。

(3) 言語と表現

ことばとは「辞書の中にある時よりも美しさを加えていなければならぬ」。ことばはその組み合わせや配列によって、辞書的な意味だけでは律し切れない、その表現独得の味わいや匂いを持つてくる。

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。両手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうにな

る程、見開いて、唾のやうに執拗く黙つてゐる。

これは周知のとおり、芥川竜之介の『羅生門』の一節である。例えば、この一節の「執拗く」ということばに眼を向けて見ればどうだろうか。ただ単に「シュウネシ」（ちなみに「広辞苑」をひいてみると、「執念が深い。執着が強い。」と、その語義が出ている）という古語を用いたということにはとどまらない、あるリズム感の中の、みずみずしい情感を感じ取りはしないであろうか。芥川（作家・送り手）の精神の文脈において、と同時に、『羅生門』発表当時の読者層をなした大正期の知識人たち（受け手）の精神の文脈において、実にマッチしたことばとなっているのである。治承・寿永の平安末期の動乱期を、したたかに生き抜いてきた老婆の婆をリアルに浮彫りにすることばとして、送り手と受け手との関係の中で躍動しているのである。とにかく、そこには、古語の現代語への優れた再生ということにのみとどまらない、美しいことばの創造が見てとれるのである。

文学の領域にとどまるだけではなしに、日常生活における私たち一人一人の言語活動も、その限りでは、程度の差こそあれ、創造的な表現行為であると言える。そして、そうした表現行為は、私たち一人一人が持っている独自の言語体系と、さまざまなことばのスタイルの上に営まれている。こうした点を考えて見れば、言葉の使用は、実に、多様で複雑なものだと言わなければなるまい。

R・W・ラネカーは『言語と構造』（牧野成一訳）の中で、ことばの多様性を論ずるに必要な「三つの次元」として、

- 一 地理的な次元
- 二 社会集団の階級の次元
- 三 一人一人の話し手個人の次元